全眞教団と修行——禁忌をめぐって——

川股寛享

はじめに

全眞教の開祖、王重陽は正隆四年（一一五九年）甘河鎮で一先生から口訣を授けられた「甘河の遇仙」を機縁に妻子を捨て俗縁を絶ち、南時村の「活死人の墓」において二年半に渡り打坐の修行を行うなど、常軌を逸脱した厳しい修行を行った。

全眞教団の修行の目指す所は「本来の眞性」を得るためであるとされる。それは、靜坐などの修行を基とする性功と命功による「内功」である自己救済と同時に、「外行」である他者救済の実践を行う必要があったという。そして、「内功」の修行である靜坐を行う施設である「環堵」を道観内に設けていた。これらの修行を行う道士は、日常生活の中で忌むべき行い、対象があったはずである。特に王重陽が読んだ詩詞には、「酒色財氣」という言葉を用いて弟子に対して戒めを説く例が散見される。「酒色財氣」とは、一般に飲酒・色欲・財欲・短氣を意味する言葉であるが、この「酒色財氣」が示す具体的な意味と彼の説く眞意とは如何なるものであるのだろうか。

本稿では、「内功」の修行である「打坐」・「靜坐」の様子とその目的を確認した後、全眞教団の道士として守るべきこと、特に「靜坐」の修行を行う上での禁忌を王重陽と馬丹陽の教説を中心に考察したい。

一、全眞教における「靜坐」

全眞教文献に頻出される修行法である「打坐」・「靜坐」とは、どのような修業なのであろうか。全眞教団の教説の特徴を端的に表す開祖、王重陽の著とされている『重陽立教十五論』の第七条「論打坐」において次のように言う。

> 凡そ打坐は、形體端然を言うに非ず。目を瞑り眼を合するは、此れ是れ假坐なり。眞坐は、須らく十二時辰、住行坐臥するを要め、一切の動靜は中間、心は泰山の如く、動かず搖がず、四門たる眼・耳・口・鼻を把斷し、外景をして内に入らしめず。但だ絲毫の動靜 思念有れば、即ち靜坐と名づけず。能く此の如き者は、身は塵世に處ると雖も、名は已に仙位に列し、遠く他人を參ずることを須ず、便ち是れ身の内の賢聖なり。百年 功滿つれば、殼を脱し眞に登り、一粒の丹は成り、神は八表に遊ぶ。[1]
>
> （『重陽立教十五論』第七論打坐）

打坐とは、ただ姿勢を正して目を瞑り、また目を合わせて坐る事では無く、二四時間中、一切の動靜において、心は泰山のように動かず、眼・耳・口・鼻の四門を閉じて外景を内に入れないようにすることである。もし、雜念がわずかでも生じれば、靜坐ではないとする。そして、「打坐」・「靜坐」の修行を行うことで、丹を煉ることができるという。これは、全眞教団における内丹の実践方法の一つである。

実際、全眞教の道士は、どのように「靜坐」に取り組んでいたのであろうか。王重陽の死後、教団をまとめ、陝西省に教線を大きく拡大した馬丹陽は、弟子に対して次の様に述べる。

> 師曰く、夫れ道は無心を以て體と為し、忘言を用と為し、柔弱を本と為し、清爭を基と為す。飲食を節し、思慮を絶ち、靜坐して以て息を調え、安寢して以て氣を養う。心 馳せざれば則ち性は定り、形 勞せざれば則ち精は全し、神 擾せざれば則ち丹は結ばる。[2]
>
> （『甘水仙源錄』巻一「全眞第二代丹陽抱一無為眞人馬宗師道行碑」）

馬丹陽が説く結丹の方法は、飲食を少なくし、思慮をやめる。その上で静坐をして調息の法を実践し、氣を養い、心を静かにすることで性は定り、肉体を安静にすることで精を全し、神を乱さないことが大切であるという。つまり、丹陽は、静坐とは氣をめぐらす調息の法であると考えていたようである。例えば、弟子である趙悟玄が丹陽の下で行っていた修業を示すと、「丹陽、教うるに息心養性の術を以てし、浸く得る所有り。長安の人 趙恩、第宅を虚しくして以て請う。乃ち築きて環堵と為し、師・弟子、入りて其の中に居す。今の蓬萊觀是れなり。宴坐すること數皖、心境澄徹し、至理貫融す。丹陽の學を得ること多爲り。」（「弘玄眞人趙公道行碑」趙悟玄）[3]という。馬丹陽から内丹の術である「息心養性之術」を学び会得した趙悟玄は、師の丹陽と共に行動した。その際、師と弟子は共に「環堵」の中に入居した。趙悟玄は、その「環堵」で静坐の修行を積むなど、丹陽に教えを受けて修行を行っていたと考えられる。[4]

全眞七眞の一人である丘長春の死後、掌教を継いだ尹志平が、弟子達に道を説く中で、自らの修行を振り返って次のように言う。

> 吾れ玉清觀に住す。（中略）往日 飯を乞いて園に坐するは、皆な是れ心上に開悟する所有るも、未だ純一に至らず、是を以て静に居して涵養し、體は眞空を究む。[5]
>
> （『清和眞人北遊語錄』巻一）

尹志平は、玉清觀（山東・濰坊市）の環堵で坐して、静坐の修行を行っていた。そして静坐によって彼は、いくらか開悟する所はあったが、丹を純一に煉るまでには至らなかったという。しかし「居静涵養」つまり、静坐を続け修行を深めることで、體は眞空になったと静坐による修行の成果を述べる。このように彼は、生涯に渡って静坐を重視していたとされる。また、彼の静坐を重視する姿勢は変わらず、晩年の尹志平を示す文献では、「噫、今眞人は堂を退き閑に就き、終日静坐す。[6]」（『清和眞人北遊語錄』序）と尹志平が、六九歳の時に掌教を李眞常に譲った後の最晩年においても一日中「静坐」をしていたのである。

尹志平が、「環堵」や「静坐」に対してどのように考えていたのか『清和眞人北遊語錄』を通して見てみると、

> 凡そ精を損じ、神と氣を損ずるは、皆な邪なり。學

人此れを知らず、多く絶念に執して是を為す。如し理に依り用を作せば、累功積行の正念、亦た将て絶たんか。之は絶てば則ち又た死物なり。豈に道に通ずる可けんや。正に如し人は環堵に坐し、敢えて一物を交えず、敢えて一念を動かさずして、其の道を守待せんと欲す。其の道を識らざれば果たして守待す可けんや。果たして守待すべからざらんや。吾れ将に天地を以て環堵と為し、其の間を逍遙盤礴して、物と與に相い週旋し、綽綽然として自ら餘地有り。未だ道を妨げる有るを覺えざるなり。(7)

（『清和眞人北遊語錄』巻二）

尹志平は、道を得る上で精を損ない、神・氣を損なうことは、邪であると説く。そして、修行を行う道士が、念を絶つことばかり意識している現状を問題視する。その上で、普通は環堵の中に閉じこもり、靜坐をして内丹の修行を行うが、尹志平は、天地全体を環堵（修行空間）であると意識して、広く行動して道を識ることが大切であるという。そのためには、「内功」の修行だけでなく、他者救済を行う「外功」の大切さも意識しているのではないだろうか。

馬丹陽と同様に尹志平も「精・氣・神」を守ることが、道士の修行において大切であると考えていたのである。また、圓明眞人の靜坐の様子を次のように言う。

夜分に至る毎に、神を澄ませ靜坐し、旦に達するも寐ず。其れ修眞錬養の功、習いて以て常と為す。是を以て年八旬を逾え、歩履康強、精神充擇す。(8)

（『終南山祖庭仙眞内傳』巻下　圓明眞人）

圓明眞人と呼ばれる道士である高道寛は、夜になるたび靜坐して修業を行い、朝方になっても眠らずに修行を行っていたという。このような修業を一年の中で八〇日間に亘って実行していた結果、彼は「歩履康強」・「精神充擇」とあらわされる境地を手に入れたのである。ここでも、「神」に関する問題が触れられている。つまり、神を澄ますことが、靜坐を行う上で肝要であったのである。

全眞教の道士の修行は、靜坐をして「精・氣・神」を守ることが丹を結び、道を得るために重要とされる。彼らは、どのような心構えを持って修行に向き合っていたのであろうか。

二、修行の禁忌―「酒色財氣」

全眞教団の道士が結丹を得る際に障害となる行いが「精を損じ、神と氣を損ずるは、皆な邪なり。」と表現されることを、尹志平の言葉を借りて先述したが、これらの妨げを助長する行いとは、如何なるものであったのであろうか。王重陽の撰とされる『重陽眞人金關玉鎖訣』は、「金關玉鎖の法」の口訣を述べる文献の中で重陽は、修行をする前提として次のように述べる。

> 或るひと問いて曰く、「是れ修眞の妙理は如何や。」答えて曰く、「第一に先ず無名の煩惱を除く。第二に酒色財氣に貪戀するを休む。此れは便ち是れ修行の法なり。」と。
>
> 問いて曰く「是れ五行之法は如何や。」訣に曰く、「第一に先ず須く戒を持し、清靜にして辱をしのび、慈悲にして善を實とし、十惡を斷除し、方便を行いて、一切の衆生を救度し、君王に忠として、父母師資を孝敬すべし。此れは是れ修行の法なり。然る後眞功を習う。」と[9]

（『重陽眞人金關玉鎖訣』）

修行者から修身の妙理は何かと問われた重陽は、煩惱を除くこと、「酒色財氣」[10]を遠ざけることであるという。続いて、戒を守り、身体を清靜にして辱めを受けても絶え、慈悲の心を持ち善良であること。十惡を絶ち、人々を救済すること。君主に対しては忠を持ってし、父母には孝行を、師匠に対しては敬を尽くすことが「修行の法」であると説く。そして、これらの事を守ってはじめて、「内功」や「外功」の修行による「眞功」に取り組むべきであるという。ここで言う「十惡」とは、仏教でいう身口意に関連する妄言・姦淫・嫉妬などの十種の悪と同様であると考えられている。[11]

ここで問題とされる「酒色財氣」に関して王重陽は、『重陽全眞集』に所収される詞で詳しく述べている。

> 酒
>
> 酒は、酒。昏に悪く、口を臘る。性は昏多く、神は秀でず。眞元は損敗し、眉毳を消磨す。半酣して腑腸を愁え、大醉して心首を摧く。己に於いて唯だ猖狂を恣にし、人に對して更に慚忸を没す。飲まずに

永く醒醒たるに如かず、害無く災無く九九を修す。

色

色は、色。禍多く、福を消す。金精を損い、玉液を傷る。氣神を摧殘し、仁德を敗壞す。會く三田を空ならしめ、能く五臟を惑わしむ。一性の靈明を亡殞し、四肢の筋力を絶盡す。做さずに永く綿綿たるに如かず、害無く災無く長に得得なり。

財

財は、財。孽を作し、媒を為す。唯だ色を買い、會く盃を招く。更に德をして喪わしめ、便ち殃をして來たら惹む。積みて三界の苦を成し、九幽の災を脫するに難し。家の豐富を增さしむるに至りては、怎生て輪迴を免るを得ん。要めずに常に常樂たるに如かず、害無く災無く毎に恢恢なり。

氣

氣は、氣。神を傷り、胃を損す。猩瘴を騁せ、甚の滋味。七竅は仍ち前ち、二明は沸くが若し。道情は能く轉ずること勿く、王法は寧ぞ肯て畏れん。勝を鬪いて各傑儸を衒い、強を爭いて轉亂費を為す。作さずに好く休休たるに如かず、害無く災無く貴貴に通ず[12]

（『重陽全眞集』卷一）

内丹用語が頻出し、判然としない箇所もあるが、「酒・色・財・氣」は、道を修める（丹を練る）上で障害となるのは、酒を飲むこと、色を犯すこと、財産を持つこと、氣を損なうことが問題視され、取りあげられている。そして、これらが原因となって、身体に害を与え、災いが降りかかり修道の邪魔となるとされる。酒は「昏に悪く、口を臟る。性は昏多く、神は秀でず。」、色は「氣神を摧殘し、仁德を敗壞す。」・「能く五臟を惑わしむ。」と述べ、酒色は修行者の身体に直接大きな害を与える。また、財は、「孽を作し、媒を為す。」と考え、様々な悪事を媒介する原因である。特に「唯だ色を買い、會く盃を招く。」と述べ、酒を飲み、色を犯す原因を作り、德を失わせると言う。氣は、一般に短氣を起こす。怒りの感情を起こすことであると考えられている。特に「神を傷り、胃を損す。」と考えている。また、王重陽は、「酒色財氣」の戒めは、馬丹陽を教化する時にも用いられており、『重

陽教化集』に所収される詞「化丹陽」には次のように述べる。「凡そ人の修道は、先ず須く此の一十二箇字、酒色財氣・攀緣愛念・憂愁思慮を斷ずることに依るべし。」[13]という。このように王重陽が馬丹陽を教化する時に与えた十二字で示される戒の中でも「酒色財氣」に関する規定が、最初に述べられている。

王重陽が、「酒色財氣」を斷つことが、修行に取り組む上での前提条件と考えるのは、どのような考えに基づくものであろうか。佛教の影響は、もちろん考えられるが、ここでは王重陽の著作の中からその淵源をたどってみたい。『重陽教化集』に所収される「讀晉眞人語錄」に次のように述べる。

> 大凡 道を學ぶには、殺盜・飲酒・食肉・破戒・犯願することを得ず。[14]
>
> （『重陽教化集』巻二「讀晉眞人語錄」）

王重陽が読んだという『晉眞人語錄』の著作者とされる晉眞人はどのような来歴を持つ人物であるか判然としないが、重陽は、『晉眞人語錄』[15]を読んで、道を学ぶ人が守るべき戒として、殺人、窃盗、酒を飲む、肉を食べること戒める点を挙げる。ここで強調されているのは、飲酒・食肉を禁じるだけであるが、『晉眞人語錄』には、「不得殺生・飲酒・食肉・破戒・犯色。」と述べ、飲酒・食肉の他にも、色を犯すことも挙げているのである。

重陽が『晉眞人語錄』を読んだ時期は不明であるが、「甘河の偶仙」の後、「活死人の墓」で修業に取り組む以前に妻子と離縁しており、また、馬丹陽を教化する時も妻と離縁させるなど、出家主義の考えを色濃く打ち出している点を鑑みると、「讀晉眞人語錄」には、述べられていないが『晉眞人語錄』が挙げる「犯色」の考え方も比較的早期の時期から取り入れていたと考えても良いだろう。この王重陽の「色」に関する考え方は、馬丹陽に対しても強く継承される。丹陽は、『洞玄金玉集』の律詩「自述」で次のように説明する。

> 妻を寵するは是れ聰明漢にあらず、色を好むは誠に憎憧哥と為すなり。稍稍も心を留むると毒手に遭い、微微も意に掛けると他魔に著く。精は枯れ髓は竭き形容は瘦せ、氣は散じ神は衰え鬼使に拖かる。我れ悟り我れ驚き當に早く避くべし、何ぞ須らく直だ鼓盆歌を待つべけんや。[16]

（『洞玄金玉集』巻三「自述」）

馬丹陽は、自らの事を述べた詩の中で、妻を持つことは、道士として道理に通じない行いであると考えている。そして、「犯色」の害悪は、精が枯れて髄が竭きて身体は痩せ細り、氣は散じ、神は衰えて鬼に駆使されるとする。そのため、早くその害悪を悟り、「犯色」つまり、女性を遠ざけるべきであるという。

王重陽が「讀晉眞人語錄」の中で道を学ぶための条件として挙げる「食肉」に関する問題は、全眞教の文献に散見される。

節を改めて全眞教団と「肉食」に関する問題を検討する。

三、肉食について

肉食にかかわる問題は、佛教教団で問題とされることが多い傾向にある。一般に中国佛教では、『入楞伽經』遮食肉品や疑経とされる『梵網経』、梁武帝の「斷酒肉文」など肉食を禁止し、菜食主義を建前とする。[17] しかし、宋代の佛教教団の様子を蘇軾は、僧侶は酒を般若湯、魚を水梭花、鶏肉を鑽籬菜と称して食べていると記しており、現状は複雑な問題を抱えていたようである。[18]

全眞教団においても、王重陽は、肉食を戒めているが、全眞七眞をはじめとする道士は、どのように考えていたのであろうか。重陽が考える肉食つまり、葷食禁止の具体例は「贈王哥」に記述される。

（前略）柴を搬び水を運ぶこと唯だ聞を做し、相い觀て存思して各々自ら為る。食を減じ情を忘れて慷慨を為し、歡に任せて樂を取ること是れ修持なり。人を救うに藥功を設くること尤大、酒を戒め葷を除く行は最も宜し。（後略）[19]

（『重陽全眞集』巻十「贈王哥」）

存思法を行う上で大切なのは、酒を飲まず、葷を除くことが最も大切であるという。ここで示される葷は、肉や蒜などの香菜を指すのであろう。しかし、王重陽が弟子達に行った教化の中に、弟子達に肉・魚肉を食わせる例がある。

師 自ら四つの鯉を市い、穿ちて之を拖き、邸中に入る。羊肉二斤を以て、併せて之を煮て、之を熟藏

すること月餘、其の魚肉皆な臭敗す。門人弟子に之を食わしむ。時に各々に葷葷を戒め、敢えて食する者は有る莫し。師は偏を問うも、皆な曰く「敢えてせず。」と。馬鈺 獨り稽首して曰く、「師は食わしめ、弟子は之を食す。」と。師 叱りて曰く「汝じ自ら斷得せず、我に託さんと欲するや。」と。遂に與して鉢に滿たす。師復た曰く「關西に到れば、此の物は無し、與に汝之を食せ。」と。凡そ數朝、先ず鈺に早 羊魚を食さしむ。[20]

（『歴世眞仙體道通鑑續編』巻一　王嘉）

王重陽が、七眞を伴って山東から陝西に赴く途中、開封での出来事である。重陽は開封で亡くなるため、最晩年の逸話の一つとされる。

重陽自ら、四匹の鯉を贈入し、その鯉を引きずって、旅邸に帰って来た。それを羊肉二斤と合わせて煮込んで、一カ月以上しまっておくと、魚肉とも腐敗した。これを弟子達に食べさせようとすると、弟子達は、師である重陽が葷食（葷葷）を戒めているので、誰も食べようとはしない。重陽が、再度、皆に進めるが、弟子達は食べようとしなかった。そして丹陽が、「師が食べろというのなら食べます。」と言うが、重陽は、怒って「おまえらは、自分で判斷せずに、私のせいにするのか」と答え、鉢いっぱい与えた。また、重陽は、「關西（陝西）に行けば、これは無い、おまえら食え」と言い、数日に渡って、丹陽に食べさせたという。

王重陽は、修行の一環として弟子達に腐った魚肉を食べさせるのであるが、何ゆえにこのような行いをしたのかは判然としない。先行研究によると、四匹の鯉は、四哲の象徴であり、羊肉は、陽の氣の象徴、鯉は、陰の氣の象徴であり、羊肉が二斤なので鯉四匹も二斤であったに違いなく、陰陽二斤が併せて煮られて四斤の金丹ができる仕掛けであり、併せて熟蔵したのは、元神元氣の交流から金丹の結就までを象徴とする。[21]

馬丹陽や七眞の様子を見ても、全眞教の道士は日常的に生臭い肉を食さないとする認識を持っていたことは間違いないであろう。この点は、次の掌教である馬丹陽の教説にも色濃く反映されている。馬丹陽の語録である『眞仙直指語録』には次のように言う。

又た曰く、酒は亂性の漿と為し、肉は斷命の物と為して、直だ須く喫せざるを上と為す。酒肉を犯すの

愆は猶お恕す可きも、若し色欲の罪を犯せば、容誅せざる。蓋し色は之れ人を害して、狼虎なること甚だしく、人の美行を敗り、人の善事を損ない、精を亡ぼし神を滅して、軀を損なうに至る。故に道人の大孽と為すなり。[22]

（『眞仙直指語錄』巻上）

馬丹陽は、酒は性を乱し、肉は命を斷つ原因であると考え摂取することを禁じている。また、飲酒、肉食より重い過ちは、色欲を犯すことであると考えていたようである。[23]その他にも馬丹陽が読んだ詩詞の中には、葷食・飲酒を戒める詩詞が散見する。[24]

丹陽は、自らの生涯を顧みて酒肉を摂取することの弊害を述べる内容が『丹陽眞人語錄』に所収され、「師言く、「我れ嘗て俗中に在りしの時、肉を秤り酒を斟るも、今已に之の十数年戒める。若し酒肉を食せば、亦た神仙に做ること、只だ是れ遅を較い些に了わる。若し心に道を懐わざれば、又た酒を嗜み羶を貪り、徒らに口腹は渓やむ、罪に報じて難に逃れる。終に下鬼の類と為すなり。」[25]と。」と述べ、出家する前は、飲酒、肉食をしていたが、出家後は戒めており、その理由を道士が、酒肉を摂取する害は、道を得ることを難しくするとともに、修行に取り組んでも些細な成果しか生み出さないと説明する。そして、眞剣に道を修めようとしないからこそ誘惑に負け酒を飲み、肉を食するのであると言い、修行に対する心構えの未熟さを問題とするのである。

その他の道士の言動を見てみると全眞七眞の一人とされる劉處玄の撰とする『仙樂集』の中で「食葷勿殺生、治政似冰清。[26]」と述べ、馬丹陽の弟子である王丹挂が撰した『草堂集』には、「遠葷止酒戒腥羶、做就出家行遣。[27]」と言う。李志常の傳を収めた碑文である「玄門掌教大宗師眞常眞人道行碑銘」にも「茹葷飲酒之戒涓滴不犯。[28]」と肉をはじめとする葷食・飲酒を戒める言葉が散見する。

王重陽や馬丹陽をはじめとする弟子達の文献に散見する「酒色財氣」や「食葷」など道士が修行をするための禁忌に関する文言は、全眞教団や後世の弟子達にどのような影響を与えたのであろうか。

馬丹陽の教説の中で道士生活の戒めを説いた『眞仙直指語錄』の末に記される「又十勸云」では、道士が生活する上で守るべきことを定めた十の事柄の三条に「酒色財氣、是非人我を斷つ。[29]」と述べる。この「酒色財氣」に関わる禁忌は、現存最古の全眞教の清規である『全眞清規』に所収される「教主重陽帝君貫罰榜」にも成文化

されている。

四、酒色財氣食葷、但だ一を犯す者は罰出す。[30]

（『全眞清規』「教主重陽帝君貴罰榜」）

「教主重陽帝君貴罰榜」は、開祖王重陽が説いた教規十条という意味であるが、実際は、後世に王重陽に仮託されて著作された文献であるとされ、全眞教の道観で運用されていた清規であるとされる。[31]この教規である「教主重陽帝君貴罰榜」は、「酒色財氣」・「食葷」を一つでも犯した道士は罰を加えると言う。しかし、「教主重陽帝君貴罰榜」が説く「罰出」とは、具体的にどのような罰則を指すのかは判然としない。

初期の全眞教団の中で、馬丹陽が示した「十勸」の内容が道士の生活に対して一定の効果を持っていたであろうが、丹陽に学んでいない弟子や丹陽の死後においてどのような位置づけであったのかは不明である。しかし、後世に編まれた「教主重陽帝君貴罰榜」には「酒色財氣」・「食葷」を戒める記述が確認されることを鑑みると、教団の中で、王重陽や馬丹陽が説いた戒めは脈々と受け継がれていたのであろう。

おわりに

道士が、道を得るために環堵の中で「靜坐」の修行を取り組むが、その際障害となるのは、精・氣・神を損なうことであると考えられていた。そのため、原因となる「酒色財氣」と表される飲酒・色欲・財欲・怒りを起こす事と、「食葷」の言葉で示される肉などの生臭き物を食することを戒めたのである。つまり、これらの禁忌を守ることが、全眞教団の道士として活動し、特に修行をする上で戒めるべき最も基本的な事柄だったのである。この王重陽が説いた教説は、弟子の馬丹陽に受け継がれ、元朝初期から中期の著作とされる『全眞清規』の「教主重陽帝君貴罰榜」では、成文化され道士の生活規範として順守すべきことの一つとして数えられるのである。

最後に『全眞清規』が影響を受けたと考えられる崇寧二年（一一〇三年）に禪僧宗賾が編纂した禅宗の清規『禪苑清規』護戒の記述は、次の様に言う。

受戒の後、常に守護すべし。（中略）不應食（葱韮・薤蒜・園荽・酒肉・魚兎及び乳餅・酥酪・蠐螬の卵・猪羊の脂を用いるは、竝な食すべからず。如

し病縁に遇わんには、寧ろ身命を捨つるとも、終に酒肉俗味を以て禁戒を毀らざれ。)、非時食(小食・藥石、果子・米飲・豆湯・菜汁の類となり。如し齋粥の二時に非ざれば、竝な是れ非時の食なり。)の如きは、並な宜しく服禁すべし。財色の禍、毒蛇よりも甚だし。尤も當に遠離すべし。[32]

(『(重雕補註)禪苑清規』巻一　護戒)

このように『禪苑清規』では、酒肉の禁戒に対して厳しく身命を賭して守るべきとする。そして、戒を破るのを防ぐために酒肉・辛菜を寺内に持ちこむことを禁じている。[33]また、財色の禍も毒蛇より害のある存在であると規定しており、「教主重陽帝君賞罰榜」に記述される内容と類似することを留意する必要がある。しかし、清規をはじめとする全眞教と禪宗の関わりは今後の課題としたい。

【註】

(1)王重陽　撰『重陽立教十五論』第七論打坐(『正統道蔵』第五四冊、一三八頁)

凡打坐者、非言形體端然。瞑目合眼、此是假坐也。眞坐者、須要十二時辰、住行坐臥、一切動靜中間、心如泰山、不動不搖、把斷四門眼耳口鼻、不令外景入内。但有絲毫動靜思念、即不名靜坐。能如此者、雖身處於塵世、名已列於仙位、不須遠寥他人、便是身内賢聖。百年功滿、脫殼登眞、一粒丹成、神遊八表。

(2)李道謙　編『甘水仙源錄』巻一「全眞第二代丹陽抱一無為眞人馬宗師道行碑」(『正統道蔵』第三三冊、一一七頁)

師曰、夫道以無心為體、忘言為用、柔弱為本、清爭為基。節飲食、絶思慮、靜坐以調息、安寢以養氣。心不馳則性定、形不勞則精全、神不擾則丹結。

(3)李道謙　編『甘水仙源錄』巻四「弘玄眞人趙公道行碑」(『正統道蔵』第三三冊、一六一頁)

丹陽教以息心養性之術、浸有所得。長安人趙恩、虚第宅以請。乃築爲環堵、師弟子入居其中。今蓬萊觀是也。宴坐數皖、心境澄徹、至理貫融。得丹陽之學爲多。

(4)全眞教団における環堵の役割に関しては、川股寛享「全眞教団における「庵」と「環堵」について」(龍谷大学大学院文学研究科紀要』第三五集、二〇一三年を参照。

(5)尹志平　述　段志堅　編『清和眞人北遊語錄』巻一(『正統道蔵』第五五冊、七三〇頁)

吾住玉清觀。(中略)往日乞飯坐圜者、皆是心上有所開悟、未至純一、是以居靜涵養、體究眞空。

(6)尹志平　述　段志堅　編『清和眞人北遊語錄』序(『正統道蔵』第五五冊、七二三頁)

噫、今眞人退堂就閑、終日靜坐。

(7) 尹志平 述 段志堅 編『清和眞人北遊語錄』巻二（『正統道藏』第五五冊、七三六頁）

凡損於精、損於神與氣者、皆邪也。學人不知此、多執絶念為是。如依理作用、累功積行之正念、亦將絶乎。絶之則又死物也、豈可通於道。正如人坐環堵、不敢交一物、不敢動一念、而欲守待其道、不識其道果可守待邪。果不可守待邪。吾將以天地為環堵、逍遙盤礴於其間、而與物相週旋、綽綽然自有餘地、未覺有妨於道也。

(8) 李道謙 編『終南山祖庭仙眞内傳』巻下 圓明眞人（『正統道藏』第三二冊、五七五頁）

每至夜分、澄神靜坐、達旦不寐。其修眞鍊養之功、習以為常。以是年逾八旬、步履康強、精神充擇。

(9) 王重陽 撰『重陽眞人金關玉鎖訣』（『正統道藏』第四三冊、五八〇頁）

或問曰、「如何是修眞妙理。」答曰、「第一先除無名煩惱。第二休貪戀酒色財氣。此者便是修行之法。」

問曰、「如何是五行之法。」訣曰、「第一先須持戒、清靜忍辱、慈悲實善、斷除十惡、行方便、救度一切衆生、忠君王、孝敬父母師資。此是修行之法。然後習眞功。」

(10)「酒色財氣」という言葉は、宋代から士大夫の文集に見られる言葉であるという。葛氏は『禪宗与中国文化』の中で、士大夫と禪宗との関係について述べる。『禪宗与中国文化』（上海人民出版社、一九八六年）百頁參照。

(11) 蜂屋邦夫「『重陽眞人金關玉鎖訣』について」『東洋文化研究所紀要』第五八冊 一九七二年

(12) 王重陽 撰『重陽全眞集』巻一（『正統道藏』第四三冊、四三二頁）

酒

酒、酒。惡昏、臘口。性多昏、神不秀。損敗眞元、消磨眉壽。半酣愁腑腸、大醉摧心首。於己唯恣猖狂、對人更沒慚忸。不如不飲永醒醒、無害無災修九九。

色

色、色。多禍、消福。損金精、傷玉液。摧殘氣神、敗壞仁德。會使三田空、能令五臟惑。亡殞一性靈明、絶盡四肢筋力。不如不做永綿綿、無害無災長得得。

財

財、財。作孽、為媒。唯買色、會招盃。更令德喪、便惹殃來。積成三界苦、難脫九幽災。至使增家豐富、怎生得免輪迴。不如不要常常樂、無害無災每恢恢。

氣

氣、氣。傷神、損胃。騁猩獰、甚滋味。七竅仍前、二明若沸。道情勿能轉、王法寧肯畏。鬪勝各衒傻儸、爭強轉為亂費。不如不作好休休、無害無災通貴貴。

(13) 王重陽 撰『重陽教化集』巻二「化丹陽」（『正統道藏』第四三冊、五五二頁）

凡人修道、先須依此一十二箇字、斷酒色財氣・攀緣愛念・憂愁思慮。

(14) 王重陽 撰『重陽教化集』巻二「讀晉眞人語錄」（『正統道藏』第四三冊、五五二頁）

大凡學道、不得殺盜、飲酒・食肉・破戒・犯願。

(15) 道藏に所収される『晉眞人語錄』を引用する。『晉眞人語錄』（『正統道藏』第四〇冊、二頁）

先生曰、學道之人、切須清淨一身、不得殺生・飲酒・食肉・破戒・犯色。每欲包容萬事、苦己饒人、棄絶嗔怒慳貪、常行忍辱儉約。見人患難、行拯苦之心、見人貧乏、必周急之。好事先人後己、待人謙上和下、以恩復讎。勿見人之過、勿語人之非、暗積陰德、不求人知、惟望天察、乃即其道人也。

(16)『洞玄金玉集』巻三「自述」(『正統道蔵』第四三冊、二四〇頁)

寵妻不是聰明漢、好色誠為愽懂哥。稍稍留心遭毒手、微微掛意著他魔。精枯髓竭形容瘦、氣散神衰鬼使拖。我悟我驚當早避、何須直待鼓盆歌。

(17) 佛教と肉食の問題に関する先行研究は、道端良秀「中国仏教と肉食禁止」『大谷学報』第四六巻二号、一九六六年・諏訪義純『中国中世仏教史研究』第一章「中国仏教徒の生活倫理規範の形成序説——肉・葷辛の禁忌を中心として——」大東出版社、一九八八年などの論考がある。

(18) 先述、道端論文を参照。

(19) 王重陽 撰『重陽全眞集』巻十「贈王哥」(『正統道蔵』第四三冊、四九一頁)

(前略) 搬柴運水唯聞做、觀相存思各自為。減食忘憎為慷慨、任歡取樂是修持。救人設藥功尤大、戒酒除葷行最宜。(後略)

(20) 趙道一 撰『歴世眞仙體道通鑑續編』巻一 王嘉(『正統道蔵』第八冊、七九三頁)

師自市四鯉、穿而拖之、入於邸中。以羊肉二斤、併煮之、熟藏之月餘。其魚肉皆臭敗。令門人弟子食之。時各戒殫葷、莫有敢食者。師徧問、皆曰「不敢。」馬鈺獨稽首曰、「師令食、弟子食之。」師叱曰「汝自不斷得、欲託我耶。」遂與滿鉢。師復曰「到關西、無此物、與汝食之。」凡數朝、先令鈺早食羊魚。

(21) 蜂屋邦夫『金代道教の研究』東京大学東洋文化研究所、一九九二年、一三九頁。

本稿において、蜂屋邦夫氏の研究に由る所は多い。

(22) 馬丹陽 述『眞仙直指語錄』巻上(『正統道蔵』第五四冊、六七三頁)

又曰、酒為亂性之漿、肉為斷命之物、直須不喫為上。酒肉犯之愆、猶可恕、若犯色欲罪、不容誅。蓋色之害人、甚於狼虎、敗人美行、損人善事、亡精滅神、至於損軀、故為道人之大孽也。

(23)『眞仙直指語錄』の文とほぼ同一の文が『丹陽眞人語錄』にも所収される。

『丹陽眞人語錄』(『正統道蔵』第四〇冊、九頁)

師曰。酒為亂性之漿、肉是斷命之物、直須不喫為上。酒肉犯之猶可恕、若犯於色。則罪不容於誅矣。何故。蓋色者、甚於狼虎、敗人美行、損人善事、亡精滅神、至於殞軀。故為道人之大孽也。

(24) 例えば、「奉勸同流聽子細、斷葷戒酒全容易。」(馬丹陽撰『漸悟集』巻上「贈衆師兄」(『正統道蔵』第四二冊、五一頁))・「羊葷酒專專戒」(馬丹陽撰『洞玄金玉集』巻二「繼馬和夫韻」(『正統道蔵』第四三冊、二八〇頁))・「優遊恬淡養眞人、不須酒肉與葷辛。醍醐三盞千秋歳、

蟠桃一顆萬年春。」（馬丹陽撰『洞玄金玉集』巻三「贈鄂縣王姑甚衆女姑」（『正統道藏』第四三冊、二三五頁））

(25) 王頤中 編『丹陽眞人語錄』巻一（『正統道藏』第四〇冊、一四頁）

師言、「我嘗在俗中時、秤肉斟酒、今已戒之十数年矣。若食酒肉、亦做神仙、只是較遲了些。若心不懷道、又嗜酒貪羶、徒羨口腹、罪報難逃。終為下鬼之類也。」

(26) 劉處玄 撰『仙樂集』巻二「五言絶句頌」（『正統道藏』第四三冊、九頁）

(27) 王丹挂 撰『草堂集』「嘆出家兒生煙發火」（『正統道藏』第四三冊、九一頁）

(28) 李道謙 編『甘水仙源錄』巻三「玄門掌教大宗師眞常眞人道行碑銘」（『正統道藏』第三三冊、一五一頁）

(29) 馬丹陽 述『眞仙直指語錄』巻上「又十勸云」（『正統道藏』第五四冊、六七五頁）

三斷酒色財氣、是非人我。

(30) 陸道和 編『全眞清規』「教主重陽帝君貧罰榜」（『正統道藏』第五三冊、二四八頁）

四、酒色財氣食葷、但犯一者罰出。

(31) 張広保『道家的根本道論与道教的心性学』巴蜀書社、二〇〇八年「早期全眞道戒律形成研究」五六五頁参照。窪徳忠氏は、「全眞教の清規について（上）」東京大学宗教学年報・Ⅻ、一九九五年では、尹志平、李志常が教団の中心であった頃に成立したとする。

(32)『（重雕補註）禪苑清規』巻一「護戒」（『卍新纂續藏經』第六十三冊）

受戒之後、常應守護。（中略）如不應食（慈韭・薤蒜・園葵・酒肉・魚兔及乳餅・酥酪・用蜻蜓卵・猪羊脂、竝不應食。如遇病緣、寧捨身命、終不以酒肉俗味毀禁戒。）、非時食（小食・藥石、與果子・米飲・荳湯・菜汁之類。如非齋粥二時、竝是非時之食也。）、並宜服禁。財色之禍、甚於毒蛇。尤當遠離。

(33)『（重雕補註）禪苑清規』巻四「磨頭・園頭・莊主・廨院主」酒肉・慈薤無使入門。